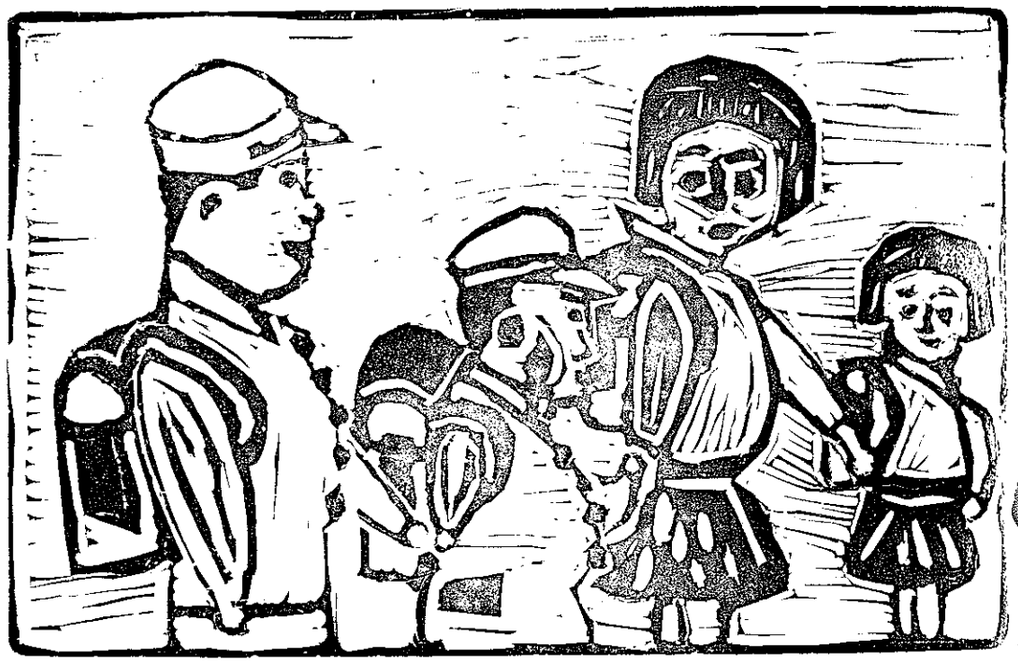
いなほ

第１３号



１９６６

椚山小学校

「いなほ」はのびる

校長　中谷　豊治

「いなほ」第十三号の誕生を喜びます。長い歴史をもつ各号の作文や詩、版画など楽しく読ませていただきました。

お父さんやお母さん、学校のこと、友だちのこと、自分の喜びやかなしみ、夢など……文の中にかようみなさんの心がよくあらわれて、ほほえましく思いました。

自分の感想をまとめ、素直に表現することはむつかしい事ですが楽しみもあり、思い出となりますね。絵や作文、詩、歌など形はちがうがみな、自分の心の中にあるものが素直に現されているのは良い作品だと思います。

「いなほ」の発行は……みなさんの進級を意味します。六年生では卒業記念文集ですね。近く中学校へ入学されるみなさんは、毎日、居残って勉強しておられるのは、えらいと思います。椚山の良い土根性を土台にして、自分から進んで学習にはげみ、正しい人間になってください。校庭の千年松のような人間に発明王エジソンさえ「天才はない、努力は天才を生む」と云っています。汗のあとにこそ楽しみがあると思います。

昨年の入善中学校の入学式に、何百人もいる講堂で、鍋島校長先生が新入生の一人一人に指名して「君は何しに中学校へきたか……」と大声で聞かれました。どぎまぎせず答えられるように、今から考え、心の準備をしておいてください。

「いなほ」も一年一年成長する事を祈ります。

表紙版画　六年　坂東　治

おがわおんせん

一年　小杉　まさひで

ぼくは　おねえちゃんと　おがわおんせんへ　いきました。バスにのると　なおきちゃんも　のっていたので　いっしょにいきました。

おんせんにつくと　にもつをおいて　なおきちゃんといっしょに　みせのちかくにある　ラジオをききにいきました。

「なおきちゃん　なにかける」と　きくと、「やわらがいいよ」と　いったので、おかねを　チリンといれたのに　なかなかならないし　どこでもめちゃくちゃに　かもてみたら　やっと　なりだしました。

らじおをきいてから　いろいろなおもちゃがあるみせを　のぞいていました。そのとき、かっこのいいひこうきがあったので「あれ　ほしいなあ」といったら、みせの女の人が　「こらっ」と　おこりました。ぼくと　なおきちゃんと　あわてて、かいだんにのぼったら、ぼくがさきにすべって、かいだんから　ドスン　ドスン　ドシーンと、おちました。なおきちゃんが　ぼくより下にいたので　ぼくがおちてきて　かつかったら、かおをしかめて「いたい」と　いうし、ぼくも「いたたっ　いたい　いたい」と　いいながら　だんだんおかしくなって「あははは っ」と　ふたりとも、　とうとう　わらいだしました。

みおくり

一年　前田　としひこ

くらいよる　みんなで　おとうさんをみおくりにいきました。

おとうさんが　ハイヤーをたのもうといって　でんわをかけました。

ハイヤーのうちの人が、「こうみんかんのところへ　いっていますから　きてください」と　いったので　ぼくたちがいくくらいところから「ここですよ」と　おとこの人がよびました。ぼくは　うんてんしゅのところにのると、あかるいひかりがついて　くるまは　うごきはじめました。ぼくはちょっと　さびしくなりました。みちをまがるとき　かたがるようになりますふみきりへくると　赤いしんごうが　ついたり　きえたりして、きしゃがきたので　はやくいけばいいがになあ　と、おもいました。

えきにつくとさむいので　ストーブのそばへいって、たてったり、すわったりして　うごいていました。ひがしから　きしゃがきたので　これにのっていくのかな　と　おもっていたら　かもつでした。おとうさんの　のっていくきしゃがきたので　ぼくは手をふって「おみやげかってきて」と　いいました。かえるときふみきりで　おとうさんのきしゃは、もう　みやざきをこえたかな　と、おもって、きしゃのせんろをみました。

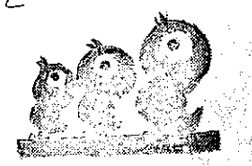
おいしいかおりがしました。

大きくひろがっていった。

にわとり

二題

一年　富山　やすこ



日よう日のあさ　げんかんをはこうとして、ほうきをとりにいくと　にわとりが、「こけっこう」と　ないていたので、にわとりは、じぶんのうちから　ぐたいがいわ、だしてやりたいな、と　おもいました。「かあちゃん、にわとりがないとるぜ　だしてやろかなん」て　いうたら、「だめ」と　いったので、「そいもん　だしてやったっていいにか」と　いうと、「なやに　おんここくからいだめ」と　いいました。

わたしは　かわいそうになって　にわとりをじっと　みていました。にわとりは　だまって　わたしのところや、なやにあったかさを　かわるがわるにみていました。

一年　坂東　あきひろ

うちのにわとりは　たまごをうみません。たまごを　うませようとおもって、けづを　ピシリと　たたくと、ぼくをつつついていきます。「ごはんなんかやらないぞ、はやくたまごをうめ」と　とりごやへはいって　「ころすぞ」といったら、「けっけっけ」と　ないてにげました。ぼくは　にわとりが、「たすけて」と　いったのだと　おもいました。

おやつ

一年　藤塚　くみこ

このあいだ　がっこうからかえって　おやつをたべました。チョコレートは　ちゃいろでした。まんじゅうは　白と　うすちゃで　じがかいてありました。わたしは、もりながキャラメルを　たべてしまうと、おとうさんがたべているりんごを　ほしくなりました。「ちょうだい」といったら、「ひとロかめ」といったので　大きい口で　あぐん　と　かみました。すると　おとうさんが　「あ、でかいとかんだや」と　わらったので　わたしも　うふっ　とわらいました。

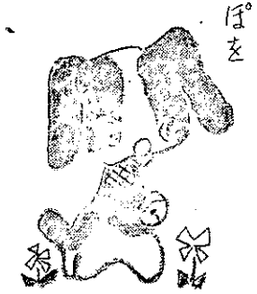
おしまいに、しんのところをすこしくれました。

いぬちゃん

一年　上野　みえこ

わたしは　まどのカーテンをあけて　いぬのきばをみていました。いぬは　ちんちんをして「ワンワン」と　いいました。わたしは　いぬがすきですから、「いぬちゃん」といって　ガラスを　トントンと　たたくと、だまって　わたしのかおを　じっと　みていました。いぬがしっぽをふったら　わたしはおかしくなって、とのかげに　かくれていました。

また　のぞいてみたら　まだ　じっと　みていました。



おかあさん

一年　金山　いくよ

わたしは　おかあさんが　だいすきです。でも　いつも　おかあさんは　とってもいそがしいので　なかなかおはなしができません。それで　おかあさんのしごとがおわって、いっしょにふろへはいるのが　一ばんたのしいです。おかあさんは　ふろにはいると、いろんなおはなしをしてくれます。だから　わたしも　おかあさんに、まり子とけんかをしたはなしや、ともだちとあそんだ　たのしいことを、みんな　おはなします。おかあさんは　にこにこ　よろこんで　はなしをきいてくれます。

きのうも　きょうも　おふろで　さんすうの　たしざんを　おしえてくれました。わたしは、まい日　おふろで　はなしをしてくれるおかあさんが　だいすきです。

コーヒー

一年　神子沢　まゆみ

ふあ　ふあと　ゆげがでました。
コーヒーは　いつものふとそうだなあ、
すぐにのむと　ふあ　と、
おいしいかおりがしました。

ミキサーカー

一年　舟本　けんじ

ミキサーカーは　かっこいいな
中みをぐるぐるまわして　いさましい
どこへでもいかれるから　だいすきだ
ぼくも　おとなになったら
ミキサーカーの　うんてんしゅになろう。
白バイにつかまったら　どうしょう
スピードいはんを　しないようにしょう
ミキサーカーにのれば　どこへでも
かっこよく　はしれるぞ
きっとなるぞ
どこへ　いかれるかな
とうきょうへでも　いきたいな。

雨

一年　西島　もとむ

白い　けむりみたいになって
雨がふっていました。
そとをとおる人は
アノラックをかぶっていくから
やだろう
下をみると
ぽつん　ぽつんと　雨のわが
いっぱいできて
大きくひろがっていった。

おとうさん（二題）

一年　谷口　まきこ

おとうさんは　でっかい石でも
へいきでもつよ。
どうしてつよいんだろう
手は大きいし　足も大きくてつよそう
わたしも　おとうさんのような
つよい人になりたいなあ
おとうさんは
子どものとき、つよかったから
おとなになっても　つよいのだろう。

一年　杉田　ようこ

おとうさん
まい日かごつくり　やでしょう
たまに　おとうさんかってあそびたかろう
まい日　たけときあのは　つめたいでしょ
「かごつくるの　さぶかろ」というと
「ゆばりがあるからい　あたたかいよ」と
いうけれど
おとうさんはまい日
いそがしいから　ひどいだろう。

すもう

一年　谷口　ひとみ

きのうわたしが、かいどうをはいとったら、うちのいぬと、ねこと　かいどうで、すもうをしていました。わたしは「やれやれ」と　おうえんをしてあげました。
いぬは「ワンワン」となくし、ねこは「ニャオー　ニャオー」とないて　大きな口をあけて、手で　いぬのかおを　くじりかいていました。
とうとう　ねこはまけたら　にげていきました。

水たまり

二年　前田　まゆみ

雨がふったら　みちの水たまりが
いけのようになっていた
がっこうの水たまりは
かめさんのようになっていた
わたしは　かめさんのせなかにのってみた。

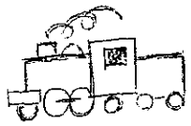
ねこ

一年　池原　としとも

ねこがひとりで　ねずみでもとらんかな
うちの人が　だれもおらっせんからい
さびしいがいろ
さびしいから　テレビの上でも
あがっとるがやろ
どべねこでも　あそびにきて　やらんかな。

金たろうおんせん

二年　長島　けん



「けんちゃん　おっきんかい。」　と　いう　おかあさんのよび声に　目を　さましました。「金たろうおんせんへ　行かんがかい。」　と、また　ふろばの方から　きこえて　きました。ぼくは　大きな声で「そうだ。」と　いいました。その声で　いもうともおきてきて「おかあさん、どこへ行くが。」と、あまえた声を　だしています。ぼくは、おかあさんと　ふたりでいくやくそくだったのに、ひとりふえるか　と　思いました。
金たろうおんせんへ　汽車で　行きました。金たろうおんせんは、まいごに　なるほど、人が大ぜいいます。いり口のところに、おとうさんに　よくにたんが　立って　います。よく見ると、やっぱりおとうさんです。ぼくたちのへやは、二百十二ごうしつで、とても　きれいな　へやでした。
それから　おとうさんと　おふろへ　はいりました。おふろの中は、まるで　おにの島みたいでした。水車も　あります。ぼくは、ちょっこしはいると、すぐあがって　子どもの　あそびばへ　行きました。そこには、じどう車や、お馬などが　いっぱいならんで　いました。ぼくは、十円で　お馬にのりました。お馬は　高へ上がったり　下がったりして　とてもおもしろかったが　二分ほどで　すぐとまりました。のどが　かわいたので　ジュースを　のみました。
へやへ　行くと、おとうさんが、「ふろへ　はいらんか。」と　いわれたので、「またあ…。」と　いいました。おとうさんは「またよ。」と　いったので、ぼくは、しかたなしに、おとうさんと　いっしょに　はいりました。こんどは　すいていました。それで、石の上ですべったり、ゆぶねの中でおよいだりして　あそびました。あんまりながくはいっていたので　ようて　しまいました。それでも　がんばってあがると、「これで　うちへかえるぞ。」と　おとうさんが　いいました。
かえりも　汽車で　かえりました。ぼくは、もう　すこし　あそんで　いたかったなあと　思いました。

雪

二年　長島　ひろ子

朝、まどから空を見た。
雪が　ちらちら　ふっている
手を出して　雪をうけた。
やわらかいのは　わたがしみたいだ。

雪は、いいなあ。
わたしも　一ぺんで　いいから
雪になって　お空を　とんで　みたい。

しんぶんしの　かたな

二年　新村　信久

こたつの上に　こしをかけて、テレビを　見ていると、にいちゃんが　しんぶんしをまるめながら　思っていると、きました。なにをするんだろう　と　ぼくのあたまを　たたきました。ぼくは　げんかんの方へ　にはかくご」　と　いって、きゅうに　ぼくのあたまを　ほそく　つよくまました。そして　しんぶんしを　ひもでしばりました。よーし、と思ってるめて　にいちゃんの方へ　そっと　歩いて　いきました。けれども、にいちゃんは　戸のかげに　まちぶせていて、ぼくは、けつを　たたかれました。あんまり早いので、たたく　ひまもありません。ぼくは、しんぶんしのかたなを　テレビの方へなげると、こたつの中に　もぐりこみました。すると、だれかが、こたつの中に、はいって　きました。おじいさんのようです。ふとんを　はぐって　にいちゃんの　ようすを見ると、うろちょろ　しています。そのうちに、こたつの方へ　きたので　ようすを見るのを　やめました。あつくなってきたので　こたつから　でていくと　せなを　ななめに　たたかれました。くやしいけれど　にいちゃんには　かないません。

ぼくは、うち中　にげまわり　ました。そこへ　おとうさんが来て、

「こら、うちを　走るな」　と　いいました。にいちゃんは　かおを　赤くして　にかいへ　行きました。ぼくは、にいちゃんも　おとうさんが　こわいんだなあと　思いました。

雪の　らくだ

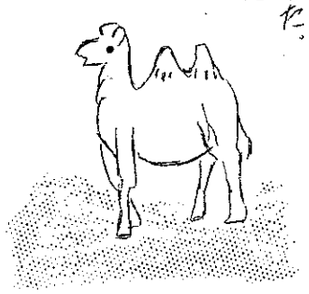
二年　杉田　春彦

ブルトーザーの　とおったあとの　かたい雪をはこぶのに　ながいことかかって、らくだを作っていると　にいさんが、雪の玉を　二つなげました。すると、らくだのかおに　あたって、ちょうど　目になりました。しっぽの方に　あなを　あけました。せなかに　こぶを　作りました。こぶは　はずれないように　つけました。にいさんは　家を　作りました。にいさんは　でき上がると、

「こんどは、雪がっせんだあ…。」　と　いいました。ぼくのらくだもついに　でき上がりました。

ぼくは、らくだに　のって　なげました。にいさんの　なげた玉が　らくだに　あたりました。でもこわれないで　はねかえりました。ぼくは、いっしょうけんめいになげました。

そのうちに、おひさまが　さしてきて、雪が　とけてきたので、らくだも　家も　こわれたので、雪がっせんを　やめました。



まきはこび

二年　中田　くにお

べんきょうを　していると　おばあさんが、

「まきを　はこんでくれ…」　と、いったので、ぼくは　走って　行きました。あんまり　あわてたので、くつを　はくのを　わすれました。

「あっ　しまったあ」　と思って　くつを　はきにもどりました。その時　また　おばあさんが、

「早く　来てくれ」　と、いったので　いそいで行きました。

いって見ると、おばあさんは　のこぎりで　木を切って　いました。

「なにを　するかけ」　と、いうと

「まきを　つんで　くれ」　と、いわれ　ました。ぼくは、すぐ　まきを　りょう手に　もって、家のき下に　はこび　ました。手で　はこぶのが　ひどくなったので、一りん車で　はこびました。まきを　つんで　いる時、ガチャ　ガチャ　と、音がしました。ぼくは、びょこんとして、にげました。ふりかえって　見ると、ちょっとしか　くずれていません。あ、よかったと　思って、くずれないように、しっかり　つみ上げ　ました。

ぼくは、手が　だるく　なったので、やすもうと思って、おばあさんを　見たら、石に　こしをかけて　おられます。ぼくも、コンクリートに　こしをかけて、しばらく　やすみ　ました。

しばらくして、おばあさんが、

「ごはんのよういをするから、おまえひとりで　しておれ」　と、いって、家の中へ　はいって　いかれ　ました。ぼくは　まきを　はこぶのを　やめて木を　切りました。ジョキ　ジョキ　と、切ると、こなが　雪みたいに　とびちりました。なん本もなん本も　切ったので、からだが　あつく　なりました。だんだん　くらくなって　きたので

「やめても、いいけ」　と　いうと、

「もう、ちょっこし　しとれ」　と、いわれ　ました。ぼくは、しかたなしに、まきのくずを　あつめたり、まきを　しばったりしていると、おとうさんが　きました。そして、

「くにお　これでやすめ」　といったので、おみやげの　チョコレートを　たべながら　テレビを　見ました。

つらら

二年　長島　正

朝、おかあさんが、「こんな　大きい　つらら」と、いわれました。ぼくは、うそだと思って、ねていると、ねいちゃんが、「八時だ」　と、いったので、いそいで　おきました。とけいを　見ると、七時三十分です。まだ七時三十分やにか、と　思って、ねようとしたら、おかあさんが、

「ごはん　たべなさい。」と　いわれました。
しかたなしに、ごはんを　たべていると、おとうさんが、つららを　もってきて、「てっぽう　みたいだろう。」と　いわれました。ぼくは　それより　ごはんを　たべるのに　いそがしくて　だまっていると、だいどころへ　もって　いかれました。

学校へ　行く道で　たばこやさんの　方まで来ると、ドタ　ドタと　やね雪が　おちて　来ました。うけようつららも　まじって　おちて　来ました。うけようとしたら、「コッツン」と、あたまに　あたりました。「いたい」と　いいながら　下を　見ると、つららが　おれて　いました。「ちえ、つまんないの。」と　いって　学校へ　いそぎ　ました。

せっけいず

二年　島房　英之

学校からかえってから、かたなを　作ろうと　思って　せっけいずを　書きました。けれども、つばのところが　へゞへゞに　なって　へんなせっけいずです。やめようかなあ。と思いましたが、また　書きなおし　ました。なんかい　書いても　つばのところが　うまく書けません。その時、「ワン・ワン。」と　メリーの　声が　きこえて　きました。ぼくは、メリーの声をきくと、元気がわいて　きました。ついに　せっけいずが　出来あがりました。こんどは　かたな作りです。せどに　つんであった　木の中から　すべすべの木を　えらんで、ゴシゴシ切りました。

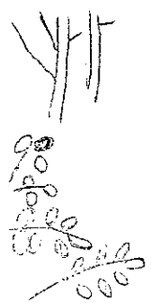
もち手の方に　紙と　ビニールのテープを　まきつけました。テープが足らなくなったので、おかあさんに　お金を　もらって　かいました。色紙は、ぎざぎざに　切って、テープの　すきまに　ぐるぐるまいて、のりで　はりました。

「どう　とう　でき上がるぞ。」と思うと、うれしくなって、とび上がりました。

いちばんむつかしいところは　かたなの先です。いいがに　ないふを　よこにして　けずらなければ　なりません。ないふを　よこにして　つくつくに　けずりました。おもしろくなったので、ひとりで「あはは、あはは」と　わらいながら　作りました。

ふと　よこを見ると、ヤビが　せっけいずの上にすわって、かたなを　見ています。ぽくは、おこって、ヤビのせなを　たたくと、「ニャーゴ。」と　なきながら、にげて　いきました。

ぽくは　くしゃくしゃになったせっけいずを　手のひらで　きれいに　のばしました。



えんぴつ対話「おかあさんについて」

三年　島　晶子
〃　扇原　優一

優一　けんかする

晶子　どういう　いみが　わからんから　いみ　わかるようにかこう

優一　おかあさん、けんかさすかって　きいたがに　は、は、は、は

晶子　けんか　あまりせんよ

優一　しくだい　おしえてくれる

晶子　たまに　おしえてくれる。

優一　うちで　しごとする

晶子　かあちゃん　ひとりで　ひやくしょ　している　から　ようしごとする

優一　おとうさん、どこえ　しごとしにいくがよ

晶子　いま　おかあさんのこと　かいとるから、おとうさんの　が　かかれんがいっそ

優一　ごはん　たべるとき　だれ　おかずかいにいく

晶子　たいてい　かあちゃん　おかず　かいにいくが、ねえちゃんもある

優一　おかあさん　おしゃれする

晶子　かあちゃん　あまり　おしゃれ　しない

優一　せんたくする

晶子　かあちゃんは、わたしたち　学校へいくとき　せんたくするが、日曜日の日は、ねえちゃんが　せんたくする　あんたちの　かあちゃんの　足　つめたいか

優一　どういう　いみか　わからん

晶子　つまり　あんたの　かあちゃんが、こたつえ　はいって　いないと　足がつめたいか

優一　クめたそう、いいがにわからんけど

晶一　あんた、いっも　うちで　かあちゃんに　どいように　よんどるが

優一　「かあちゃん」　って

晶子　あんたちの　かあちゃん　ゆういち　くんに　どうい　ことばで　よぶが

優一　「ぼうや」　って

晶子　ゆういち　くんの　かあちゃん　おけしょう　するか

優一　きょうもね　いしやへ　いくとき　くちべん　つけていった

晶子　ゆういち　くんの　かあちゃん　ゆういちくんに　おこるか

優一　だれか　くると　しずかにせ　と　おこらす

晶子　ゆういち　くんの　かあちゃん　うちで　とれた　やさいつかって　おかずを　つくるか

優一　かってくるときもあるけど　たいてい　うちのがつかう

晶子　かあちゃん　どこで　おかし　かってくるが

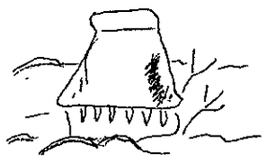
優一　あおしき

詩

つらら

三年　高見純子

屋根に、なみだのような
つらら
しょんぼりしてる
わたしに　にてるなあ
お日様がわらうと
とけていく



空

三年　青木英雄

ひろい空に
大きな雲が
ぽつかり
うかんでる

どこへいっても空が
ある。

おかあさん、なにしているの

三年　長島良子

「おかあさん、台所でなにしているの」
「ごはんをたいているの」
かまの中から
あわがでてくる
「にあがったのね」
「かまをとらなくちゃね」

「おかあさん、おふろでなにしているの」
「せんたくしているの」
グルグル
せんたくきがまわる
「でんきをとろうね」

「さあ、さあ、ほさなくっちゃ」
「あいろんをかけようね」
「たんすにいれようね」

「おかあさん、なにしているの」

手の形の木

三年　須沢和美

手の形をした木に、雪がのっている。
かわいそうに、あかぎれになっている。
わたしが、クリームをつけてあげよう。

ことしはふけいき

三年　島信子

ことしはふけいきだ。
ふけいきなので
頭までふけいきだ。
きょねんはかん字テストが
百てんだったが、
ことしは
百てんにならなかった。

戸

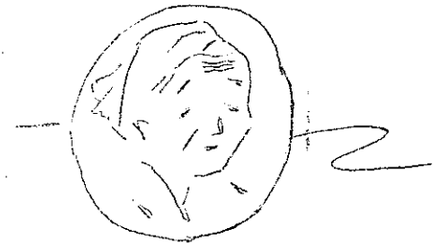
三年　飛田満

「戸はずれとるぞ。」
と、ぼくがいった
たつみ君たちが来て
戸をはめるとき
ひろし君たちの
上の方がはまった。
「なにすとらよう。」
と、ひろし君がいった。
下をはめるとき
ぼくたちがさきにはまった。
ぼくはしかえしに
「のろ、なにすとらよう。」と
いってやった。

月

三年 島 淑美

月をみていると、
まるで
しんだおばあさんのことを思いだす
やさしかった
おばあちゃんを、
月が裏のなかにはいっていく
はいっていくとき
おばあさんがきえていくようだ。
「おばあさん、」と、
よんだら
おばあさんが
「よしみちゃん」と、
よんでいるようだ。



人間

三年 坂東 輝昭

なぜ、うごくのだろう
なぜ、いきているのだろう
なぜ、うまれたのだろう
ぼくは、わからない
それに、
どうして空気が
あるのだろう。

かぶ

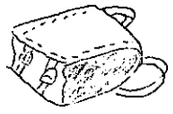
三年 坂東 妙子

おとうさんと
おかあさん
いつも
かぶの話をしている
かぶがさがると
おかあさんは
おとうさんに
「しごと、せっしゃいや。」
と、ゆわれる。
かぶがあがると、
にっこりして
おられる。

じかんわり

三年 西島 有彦

ぼくたちは、
毎日ランドセルに
どうぐをいれる。
その時は、
いつも時間わりを見る。
ぼくたちは、
じかんわりに、
めいれいされて
いるようだ。



母さんとおみやげ

四年 坂東 友子

まどから外を見ると、雪が降って大変寒そうだった。きのう、お父さんと一しょに、一日のくらしの計画をたてておいたので、そのとおりまず朝ごはんの後かたづけをして、八時から勉強をはじめていたが、とてもおちつかない。今日もしかすると、お母さんが和歌山から、帰って来るかな―。と思っていたからだ。

おねえちゃんは、犬が「ワンワン」とほえる度に「あ、お母さんだ」と言う。その度に、私は家からとびだして道へ走る。でもそれは、お母さんではなく、百合子ちゃんが雪ですべり台のようなものを作っているので、犬がそれを見てほえるのだった。

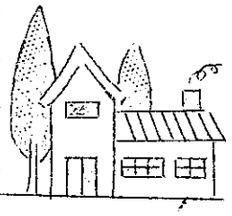
私は「お母さん、早くいらっせんかな」とばかりばあちゃんに言ったので、ばあちゃんは「そういらいあいたかったら、外で道作って待っとれよ」と言われた。それで外へでて、道を作りながら待っていたが、とうとうお母さんは帰ってこなかった。あしたはきっと帰ってこられるかなと、思いながらねむった。

次の日、島さんの言っておられた お母さんのいらっしゃる日がきた。私は、とてもうれしかった。どんなおみやげがもらえるだろうか―。と楽しみだった。十時すぎになって、やっと大きな荷物を、手にさげて「ただいま」と、げんかんにはいって、こられた。さっそく おみやげをひらいてみた。私のおみやげは、箱に入った とてもかわいい服をきた花売人形と、小学四年生の本でした。

ねえちゃんが、学校から帰ってきてから 私の人形を自分のだと思って「この人形私のやろ」と、言った。お母さんは、「あんた 何もいらんまい」と言われた。私は、ほんとにねえちゃんに、何もあたらないのかな。と思ったが、お母さんは そんなにいじわるでないから、プラチナまんねんひつを、ねえさんに買ってこられたのだった。ねえさんは それを持って、ほんとうに、うれしそうな顔で「お母さん、ありがとう」と言った。

あたらしい家

四年 島 睦子



私は、あたらしい家ができるのが、待ちどおしくてならない。勉強ぐやは、どんなになるのだろう。今までは、久美ちゃんの家のとなりだったのに、ずっとはなれてしまうからあまり遊べなくなる。ちょっとさびしい気がする。ごはんを食べている時、お父さんと お母さんは、いつもあたらしくたてる家の話ばかりしておられる。今なやにいるので、せまくて荷物がごたごたにある。きゅうくつだが、もうすぐあたらしい家へ

はいれると思ってがまんしている。
お父さんも、お母さんも、まい朝うすぐらい時から起きて、木をかたづけたり、かんなをかけたり一しょうけんめいに、はたらいておられる。私も起きたらすぐあたらしい家へ行ってみる。まっ先に見るのが自分のへやです。そのつぎに見るのがみきちやんのへや。つぎにけんちゃんのへや。その中で一番よいへやに見えるのは私のへやです。まどもついているしおし入れもある。でもみんながみきちゃんのへやが一番よいという。できあがったら私は、自分のへやをせいとんして、一番きれいにしようと思う。昨日、学校から帰ってくると、私のへやに戸がはいっているのがみえた。うれしくて家へ走っていった。ガラガラと戸をあけたりしめたりしてみた。戸をあけて海の方を見た。遠くに汽車がきてきをならして、とおっていくのがうすぐらい中に、ぼんやり見えた。私は大きな声で、学校でならった夜汽車の歌を歌ってみた。「いつもいつも、とある夜汽車」。なんべんも、なんべんも、くりかえして歌った。山の方を見ると、山には、もう雪が白くつもっている。私のへやからは どこでも見える。小さいへやだが、けしきがよいなあ。と、思った。

私は、その時よいことが思いついた。私のへやは西がわだから お友達が、学校へ行く時 私のへやの横の道をとおって行く。だから久美ちゃんがきたらすぐわかるから一しょに学校へ行ける。私はうれしくなった。

お父さんたちの方を見ると、うすぐらいところでまだ一しょうけんめい いそがしそうに、しごとをしておられた。早く家ができあがればいいなあと思う。

朝ねぼう

四年　杉田　麻子

朝、目をさました。私はねむい目をこすりながら 横を見ると、お母さんはもういなかった。二階から きいちゃんのあわただしい足音がきこえてきた。私は お母さんおこしてくれないかなー。と思いながら待っていたが、いっまで待っていても、お母さんはこない。いつもだったら今頃はもうおこしてくださるのに、今日だけはどうしたのだろう。テレビの音がきこえて七時二十五分になった。私はふとんの中で思わずなみだをほろほろとおとした。しかたなく起きて、へやで服をとり、お母さんのいる台所へいった。「お母さん、なんでおこしてくれんのけよ」。と言って、ねまきを板の上にカーばいなげ、そのまますわってないてしまいました。くつ下をさがすのに、くつ下ははいっているひきだしをあけて、くつ下を、つぎからつぎへとほんなげていたら、お母さんは、「麻子」。と言って、今まで見たことのない顔で 私をにらみつけられた。私はなおさら大きな、なみだがいくつもいくつも、くつ下の上にこぼれた。そしてなきながら、

くつ下を、かたづけていた。その時、ゆう子ちゃんの「麻子ちゃん」。と、よぶ声がした。私は泣いた顔を見られるのが、はずかしいから「先、行って」。と言った。でもお母さんは「こたつに、はいらっしゃい」。と、やさしく言われた。お母さんは、私がないているのに、はずかしいと思わんがいろかー。と、思った。私は、ゆう子ちゃんに、なみだをこぼしているのを見られないように、下をむきながら 顔をあらいに行った。すると ゆう子ちゃんが 私の後についてきたので、ぬれた手を ゆう子ちゃんにあて、ようとして、「あっちへ 行こう」。と 言った。顔を洗って、どうぐあわせもしないで 学校へ行こうとしたら、ゆう子ちゃんは「おばちゃん、麻子ちゃん ごはん食べんと行っただぜ」。と、台所へ走って行った。お母さんは「麻子」。と、言って げんかんへかけてこられた。あきぐを子に持って お母さんがこないうちに、戸を早くあけて走って行った。お母さんは げんかんで、大声で「麻子」。と、よばれた。私は 泣きながら 学校へいそいだ。とちゅう朝ねぼうした 私がわるかったのに…。と、お母さんに、すまない気がした。

自転車にのって

四年　島　久美子

朝は ひどく寒かったが、昼ごろからは、急に暖かくなってきた。午後から私の一番なかよしのお友だちと、自転車でどこかへ行くやくそくをしてある。それを思うと、学校の帰りが楽しくてならない。スキップをしたり、歌ったり、走ったりしながら 人を追いぬくと、いい気持だ。

睦ちゃんの家へついた。まず自転車があるか見に行った。睦ちゃんは、小さな声で「あれ、なかった。かんにんの」。と、言われた。私ものぞいて見ると、男の自転車が二台もある。「あるにかよ」。と、言うと「あぶないもん」。と言われた。睦ちゃんは、女の自転車にしかのれないのだ。私は がっかりして、家へ帰った。

睦ちゃんがいなくても、今日は、おもしろいぞ…。と、思いながら ばあちゃんに言ってから 自転車をとりにいった。弟にみつからないように、自転車をひっぱって、道へ出た。悦ちゃんの家へつくと、祭子ちゃんも、悦ちゃんも、自信まんまんな顔で、「自転車に、空気入れてあらいっそ」。と、言っておられる。

お菓子を買ってから、出発した。悦ちゃんも、祭子ちゃんも、小さい自転車で かめのようにゆっくりこられる。小川の方までくると、はじめの元気もどこへやら、「まだ、まだ」。と、くたびれた声がでてきた。とまり山こうえんについた。あまりおもしろくなかった。私たちは、わざわざおおまわりして、宮崎の海へ行った。波は大きく、見ていてもこわかった。ていぼうまでくる波、しぶきが私たちの

顔を少しぬらした。よくまんがにあるように、波が大きな手になって、私たちを海へ連れだそうとするような気がして、目がまわりそうだ。「ザッザッザッ、ザー」。強い音をたてて、私たちの顔をあらうていくようだ。私は、しぶきがあがる度に、雨でしぶったかと思った。何だかこわくなって帰ることにした。

帰りは、自転車をふむのがめんどうになって、みんなだまってのっていた。はじめの楽しさや、うれしさがなくなって、しまった。わかれ道へきたので「さよなら」と、いってわかれた。

母ちゃん

四年　上野　友行

ぼくのかあちゃんは、田んぼの仕事が終ってから、ずっと毎日、家でぬいものをしている。毎朝そうにぬっくれおられます。冬休みの時、雪がくって友だちの所へ遊びにいけない時、遊びあいていないので、母ちゃんに、トランプやすごろくしようと、たのんだが、ごろくやさんから、つぎかいざへと頼ってくこられるので、一度も　ぼくと遊んくれませんでした。ぼくは、遊んでくれないので

「けち」といいました。そのかわりに　着物をぬったお金で、お年玉や、プラモデル等を　買ってくれました。　冬休みが終っても、母ちゃんは、まだ　はさみを　チョキチョキといわせながら、とてしいそがしそうにぬっておられます。

それでも、たくさん雪のつもった時など、朝早く起きて、大道の方まで道をつくってくれます。たまに　学校の帰りがおそいと、大声でひどくしかる時もあります。そんな時は　大変くやしい。

母ちゃんは、着物をぬったお金で　服を買ってくださった。ぼくは、うれしくて母ちゃんが大すきだと思った。一月がすぎ、二月になっても　まだいっものへやで一しょうけんめい　着物をぬっておられます。

おばあちゃんの　手

四年　大田　佳光

おばあちゃんの　手をつめると、
しめすごく　のびる。
おばあちゃんの手に、
青すじが　とびでてる。
でらーー。　ぼくに、
おかしを　くれる、
やさしい手。

ごはん　ガスがなくなり　めっこめし（上田　武）

家のおまつだい

長島悦子

女はいつもちゃわんを洗ったり、かたづけたりしている。夕飯が終ると、男はすぐににげていく。そして、いつも女だけが残る。いつも女は、ちゃわん洗やたべ物をかたづける。その時、私はいつも思う「どうして男は、すぐこたつの方へにげていくのだろう。たまには、男もかたづけたらいいのに……」「男っていいな……」私は、こんなことをどれだけ思ったか知れない。

私は、ひとり言のようにぶつぶつ言ってもだめだ。やはり、女はやがてなんでもしなければならないのだ。……私は、ちゃわんを洗ったり、かたづけたりするほかにまだまだたくさんお手伝をしよう。どれだけ続くかしれないが、これから文句を言わないでがんばって、いっしょうけんめいにしよう。

雪道

青木長春

「行って来ます。」と言って家を出た。外に出ると、あたり一面は雪でまっ白だ。ぼくは、きれいだな……と思いながら歩いていると、北風が耳もとで「ピューピュー」と吹いて来た。ぼくは思わず、「わあっ、寒いなし」と言った。ぼくは、学校へ行くのにひとりきっりじゃさみしいから、久重君といこうと思って、久重君を呼んだ。すると、久重君が「おーい、先いっとってくれようし」と言ったので、先に行った。久重君が、きょう寒かったのでふとんからはなれるのがいやだったんだなと思った。少し行くと、雪がはげしくふって来たのでポケットに手を入れて下を向いて進んだ。ぼくは、早く学校へ行ってあそびたくなったので走った。雪がしやましてはやく走れない。雪ってじゃまばかりするな。人間で言えば、いじめっこみたいもんだな。だから、ぼくは雪がきらいだ。そう思いながら歩いた。大きな道の方へ来ると、竹の先がたれ下っていた。たくさんたれ下っていたので、ジャングルみたいだった。そこを自動車が通った。竹の雪がふわりと落ち、竹もふわりと上へあがった。まるでにんじゃみたいだったのでかっこうよかった。しばらく歩いて学校が近がづいたので走った。

雪があると通学に不便だから、早く春になるといいなあと思いながら。

勉強

舟本京子

昨晩、父に、「郁子も、京子も、行博も、いつもテレビばかり見ていては、勉強がへたになるぞ」と言われた。

私も、そうやなんと思った。私達三人は、テレビを見ない約束をすませて、仏だ部屋でいっしょうけんめいやっているうちに、勉強は、やはりだいじだなと思えて来た。

朝おきると、勉強しおわったあとは、気もちがは

れば、しっかりしている。その晩もまた、仏だん部屋で、いっしょうけんめい勉強してりっぱな人になろうと思い、おじいさんの写真を見ていると、父や母の顔まで見えるような気がして来た。私たちを、いっしょうけんめい勉強させるために、父や母は、あせ水を流して働いておられるんだなとつくづく思った。

えんぴつだって、したじきだって、みんな父や母のおかげで使えるんだ、と思うと、父や母が私たちがりっぱになることをのぞんでいるにちがいない。

私は、父や母の望みどおりになるようにいっしょうけんめいがんばろうと思う。

兄さん

前田　等

ぼくの兄さんは、銀行へ一とめている。月末になると、朝が早くて、夜はずーどおそくなる。だから三日、四日は、顔を見ない時もある。すると、母は夜おそくまで起きていなければならない。そんな時は、母がかわいそうだ。兄は、ふつうだと六時三〇分頃かえって来るが、毎日いそがしいのだろうか、家へ帰って来て、「あんちゃん」と言うと、「何んようし」とたいそがる。でも兄は、しようがをしてくれたり、こづかいをくれたり、する、ぼくが病気のときなんかは、なんでもかってくれた。でもいそがしい時がつづいて、兄の顔が見れない時は、さびしい。だけど、日曜日になると、「ピンポンしよう、しようぎしよう」といろいろ言っても、兄はいっしょにあそんでくれる。だから兄は、たまにしかるけどすきだ。これからは、兄のえ顔が毎日見れるようにしよう。

姉

上野芳則

ぼくの姉は、中学三年、毎日学校から帰って来ると、高校入試に追われているので、すぐ、ぼくに「ラーメン作ってくれ」と言う。この前だった。ぼくが宿題をしていると、姉が、はらを押さえながら、「はらへった」と言ってこたつへ来た。ぼくに、「ラーメン作ってくれよ」とていねいな言葉で言った。ぼくは、いつもは作ってやるが、きょうは、いつもとちがって「いやだ」となってやった。それが口げんかになってしまった。次の日からは何も言わなくなってしまった。ぼくは、夜ふとんの方で、姉のけい光燈がついているのを見るとかわいそうに思った。次の日からぼくは、昨夜のことを思って作ってやった。やっぱりはらがへっているのか、姉はよろこんでつるつると音をたててたべている。たまに頭がカットくるのは、姉は、とら年生れからだなと思う。だけど姉がいると、やはりたのもしく思う。

空

藤塚義成

空は　広いな。
空は、月より、地球より、太陽より大きい。
空より大きいものは何だろう。
青空の見えない日は、ぼくはさみしい。
エベレスト山より高い空だ
空はどこまでつづいているんだろう。
ロケットにのって空へ行くと、
火星や、わく星が見えるだろうか。

星

坂東百子

大空に光る星。
この星を、大昔のインド人は、全部数えあげたと言う。
大昔の人は、星をどう思ってながめただろうか。
この詩をかいているうちにも、大空のどこかに星は生れているだろう。
広いなあと思ってながめる、銀河宇宙でさえも、
大宇宙から見ればほんの一部にすぎない。
星にくらべれば、人間の心はなんとせまいことか、
私は、大宇宙に学び、広く大きい心で進みたい。

星

吉田京子

夜になると、月といっしょに出て来る星。
一等星、二等星……、五等星。
夜の空にかがやくきれいな星を、
一度でいいからさわってみたい。
つかむと星はどうだろう、
あついかな、やけどをするかな、
それとも、まぶしくてつかめないだろうか。

春が来る

坂東もと子

冬もすぎ、もう春だ。
ねこやなぎもあったかそうに顔出した。
チューリップ畑にもチューリップが芽を出した。
きょうのあったかさは、もう春だ。
もう少したては、
ちょうちょうが出て来て、いろいろな花をさかす
だろう。

明かるい力

西島康一

雪もとけ、明かるい日ざしがふりかかる。
川の水もすんで来て、つくし、ふきのとうみんな
力を出しきって、土の上に顔を出す。
明かるい力だ、春がみんなをよんでいる。

俳句

大田洋光

さくらの木、春がきたんだ花をだせ。
雪がけの黒土で春をはこんで来る。

春よ来いつくしのぼうやまちぼうけ。　坂東洋子

ふきのとう、風の中で目をさます　島尻清昭

山と谷、春がこえてやって来る
土わけて、春がはや足やって来る。　神子沢久重

山こえて、春がさとにやって来た。　長島昭二

ふで入れはいつもえんぴつ入れている　上島明則

草が出てさくらがさいて春になる　長島好一

夜空の星　北極星、流れ星。
まっすぐたれた天の川。
星はピカピカ光っている

ひとくちこそば

春の空はいいな、草は青空に目をさましたらしい。　青木孝伸

こけはあったかい、日当りの中でさわると手糸のようだ　青木申美子

風が吹いてマフラがおどっているようだ　西島恵子

春が来る、草の根わけてやってくる　前田則男

花のようにふまれて枯れるより、草のようにふまれても枯れない心をもとう　青木道子

白い山は春といっしょにひらく　杉林幸子

つくしんぼう、ふきのとう、ねこやなぎ、みんないっしょに目をさまし「もうすぐ春です」と言っている。　高見君子

雪とかす　春の力がたのもしい　浜松裕二

春がそこまでやって来て、冬さようなら　杉田高夫

春が小さな目をあけて、冬の中へ顔出した。　長島美子

星空

大空にまばたく星は美しい。
私たちにかぎりなく知えをあたえてくれる。
ピカリ、ピカリと目をさまし、
心の火をつけていく。　青木和美

夜

夜はすきだ、
星も、月も、とくに夜の雲はきれいだから。　鍋島茂

思い出

鍋谷郁子

あと数日で　あこがれの中学校へ進みます。長いようで短かった六年間が過ぎ去るのです。今考えると夢のようでもあります。ここまで私を育てて下さった先生方、桝山小学校、仲よく学び遊んだみなさんのことが、心に残り　いつまでも忘れないでしょう。

梅の花が咲き　桜も花をのぞかしたよき日、お母さんに手をひかれて初めてくぐった学校の門、どの子もにこにこと元気にあふれている。しかし　私は入善の幼稚園に行っていたので　近所の輝子さんだけしか知らない。輝子さんは、友だちの名前を教えて下さった。数日で覚え、みんなとも仲よく遊んだり、勉強することが出来た。輝子さんの親切さに　心から感謝している

月日が矢のように進み、最上級生となった。保健部の部長に推せんされた。校内の保健、友だちの治療、体重の統計、図表を書く、肝油の配分等、朝から忙しくまぐるしい仕事が続く　時に失敗もした、いやになってくる。しかし　みんなのかげだについて考えながらやる大切な仕事である。先生にこまごまと指導をうけ　みんなで協力し　はげましながら努力した。この学校が表彰状をうけたときは、ことにうれしかった。

二月四日　小学校最後の珠算大会である。前日から心配だった。『負けちゃ　いかん』、と、思っているのでなおあせる。寒い日も加わって身ぶるいする。さあ始まる。一心に数字をにらみ、珠を動かした。一人減り二人減り、最後に五人残った。妹も残っている。『妹に負けられない』、と心に誓った。一問一問答を呼びあげられるたびにどきどきす。最後の一問『勝った』。思わず声が出た。その時のうれしさは、口に表わせないほどであった。

楽しかった修学旅行、おそろしいようで愉快だった初めてのキャンプ、おなかをかかえて笑った運動会など、いろいろな思い出を心のおくに残して　明日への『力のいずみ』、として前進したい。

弟

須沢輝代

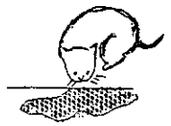
生れたときは　赤い顔して泣いてばかりいたのに、今では、歌をうたうようになりました。

私は　弟が赤ちゃんの時、「早く大きくなりないかなあ」。と、思っていたのに、実際に大きくなって見ると、いたずらばかり……

この間、妹と勉強していると、本をとったり、鉛筆でいたずらばかりします。勉強が出来ないので、こたつに入って、テレビを見ていると、今度は、スイッチを切ったり入れたり、注意すると、すぐ泣き出す。そのあとは私が叱られる。こんな時、「姉ちゃんていやだなあ」、と思います。でも弟には、悪い所ばかりではありません。小さいなりに、かわいい所もあります。

晴れたある日、おばあさんといっしょに田んぼへ行っ

ているとき、せっせと働いているおばあさんに、
「ばあちゃん、愛しちゃったのよ」。
と、言ったそうである。夕食時の慰安の話として、なごやかなひとときであった。
見つつ、聞きつつ、教えられて、弟は、日ごとに成長して行くのである。私も中学生になる。視野をひろげて妹にも、弟にも『いい　姉さんになりたい』と、思っています。



すて子ねこ

池原洋子

「ニャーオ、ニャーオ」
あたりの空気をふるわせて、とぎれとぎれに聞こえてくる弱々しい鳴き声、畑からの帰り道を急いでいた私は、はっとして声のする方向に目をやった。
私の目に写ったのは、あまりにもひもじそうな捨てねこだった。すぐにだきあげて顔をねこにつけてやった。すると、子ねこはふるえしそうに「ニャーオ」と、鳴き、手の中に小さくうずくまってしまった。その様子をみて
「もし、わたしが、父母、姉妹と別れて暮すようなことがあれば、人世はちっとも楽しくない。そのような立場にあるこのねこも、どんなにか悲しいことだろう」。
と……。
そのうちにねこは、母をさがそうとするかのように、手からおり、くらやみが包んでしまった道を、初めて聞いた時の声を出して、さまよい始めた。私も経験はないが、子ねこの気持ちがわかるような気がした。
『かわいそうに』と、思って家へ連れて帰ると、家でかっているねこが、母のように思えたのか、顔をすりつけた。家のねこも、おとなしく子ねこをみていた。母のようなやさしいその目は、『いつの日か、自分も母とひきはなされてここへ来たんだよ』と、いうように悲しそうだった。しばらくしてご飯をやると、子ねこは、前足を皿に入れ、顔や手にいっぱいご飯をつけて食べている。ずいぶん腹が減っていたのだろう。わき目もふらずかぶりこんでいた。家のねこも腹がへっているだろうに、だまってがまんしているようだ。真の親子でないこのねこの愛情に感心した。
弟や妹が帰って来て、子ねこと、じゃれていたが、お母さんは、
「かわいそうだけど家に住みつくから捨ててこい」。
と、言われた。家におくように頼んだが、だめだったので、お宮に捨てて来た。かい主があってくれるように祈って家へ帰った。
それからの数日、わたしは、悪いことをしたような気持ちで、心がはれなかった
「かい主はみつからないだろうか」。
「遠くで死んでしまったのではなかろうか」。
近ごろ、ねこの死体を見るたびに、そんなことを考え、さびしく、かわいそうなことをしたと反省している。
なぜもっと強く
お願い
しなかったことだろうかと……

キャンプ

大田哲行

ぼくたちの待っていたキャンプの日がやって来た。空は真っ青に晴れ、気持ちのよい朝である。グループで話し合った品物を用意して学校へ行った。みんな思い思いのものを持って来たのであろうまるまるとした荷物を重そうにさげている。しかし、初めてのキャンプなので、うれしそうで、心配そうな顔をしていた。いろいろな注意を聞き、自転車に乗って、春日のキャンプ場へ向った。
キャンプ場では、昨日から一足先きに来ていた五年生が、にぎやかに、楽しそうな朝食をやっていた。ぼくたちも負けないようにやり、一生の思い出にしようと思った。だが不安なので、五年生にあれこれ聞いてみた。
日程に従って行事が始まった。
海水浴だ、準備体操をして海に入った。ヒャッとする水だ。全身にしみこんできた。しかし、心身のよごれが洗いとられるようで、気持ちがよかった。
水かけ遊び、競泳等をやった。亀田先生が、波にゆられて浮いておられる。ぼくもやってみたがすぐ沈む。なぜだろうと不思議であった。そこで聞いてみた。
「腹をそらあげるようにするとよい。」
と、おしゃったので、その通りやってみる。うまくいった。

昼になったのでキャンプ場へ行った。五年生が帰ったのでそのあとをうけついだ。これからのわが家だ。みんなでそうじをしたり、中の整とんしたり、持って来たものを出し合って、夕飯の相談をした。テントの中は、とても暑くていやな気持ちであった
午後の海水浴も終り、夕飯の仕度である。ぼくたちの献立は「カレーライス」。男子はご飯、女子はカレーと分担して準備にかかった。ザクザクと米をとぐ、最後の水入れが大切とお母さんに聞いたが、なかなかきめられない。隣りの人のを見る。水を入れたり取ったりしている。思いきって水をきめる。さあ、これからたき火だ。よいご飯になるようにと火をつけだ。あちこちに煙があがった。わいわいさわいでいる。あせを出しながら笑っている友だち。ぶんぶんとよいにおいが松林をつつんだ。やがて出来あがった。初めて作ったぼくたちの食事。おいしいかおりが鼻をついた。「いただきます」。と、はしを入れた。じゃがいも　にんじん　はすしかたかった。だれも、もぐもぐ食べている。そのうちに笑声がとんだ。
なごやかな食事が終り、夕やみがテントをとりまく。今度はキャンプ・ファイヤを囲んでのつどいである。準備された位置についた。火がつけられた。天をこがすように燃えた。歌をうたったり、踊ったり　かくし芸をしたりして楽しくすごした。火はだんだん消え、あたりはまたやみにつつまれてくる。星の勉強をしてテントにもどる。どのテントからも小声が聞える。先生はときどき回って来られた。こわいと思いながらも、一日のつかれが出て来たのかねむくなって来た。

すがすがすい朝がやって来た。よくねむれなかったのか、ねむい顔をしている。冷たい水で顔を洗う。ねむけがふきとび、全員で体操をする。今日の日程が元気よくはじまった。

食事の用意、水泳など前日より上手になって来た。先生方のご指導、ありゆる経験によって、ぼくたちは刺戟された成長するのだなあと思った。

午後、雨が降ってきた。この松　あの石で作ったかまど　楽しかった多くの思い出を残して、雪山讃歌

「テントの中でも　月見はできる
　雨が降ったら　ぬれればいいさ」

と、元気よくうたって　家路についた。

大そうじ

坂東　治

今日、晴れた大変よい日であり、お盆も近づいたので、家の大そうじをすることになった。

朝食の時　仕事の分担の相談をし、ぼくと母は、家の中で、父と姉は外でそれぞれ畳を運んで干し、妹は、新聞紙をとるように話がまとまった。

食事がすむと、仕事にとりかかった。母と競争しました。負けまいと一生懸命やったが、やっぱり母にかなわない。父がそれをみて、

「治も早く大きくなってくれればいいなあ」。

と、言われた。ぼくは、にっこり笑った。母もつけ加え、

「よい子になってくれよ」。と……

ぼくは、手が白くなる、また、いたくなっても、がんばり、全部出し終った

新聞紙をとると、ところどころ穴があいている。父が、木を持って来て床をなおしはじめられた。ぼくも手伝った。いつか習った「日曜大工」が思い出て来た。

「治、さかだちするからだぞ」。

と、こわい顔して

「これから出来んぞ」。と、言われた。

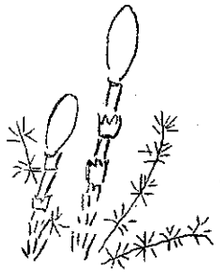
小さい声で「うん、ちえ」。と、いいながら後を見ると、そこにもあった。父は、あせを流しながら、一つ一つていねいになおしておられた。母は、天上のくものすをとったり、縁の下をはいておられる。ぼくはあちらこちらとふき回った。

「いっぷくだ」。と、かすれた声が耳に入った。まちかねたように走っていった。仕事の後のアイスクリームは、とてもおいしかった。なごやかなざっ談がはじまった。ぼくは幸福だなあと思った。

家中のきたないごみがはきとられた。黒くなった顔、つかれはてたからだをふろにつけた。ゆげとともにつかれがとんでいったようである。ふろからあがり、きれいになった畳の上にねそべった。身も心も気持ちがよかった。

つくし

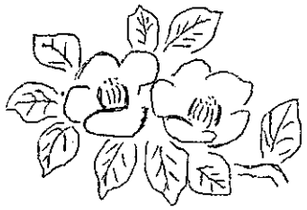
池原洋子



岩の　石がきの間から
小さな命が　生まれた
つくしのぼうや
外は北風だけど
春の光が包んでくれる
うんと　せのびよ
つくしん坊よ

はな

川城輝子



花は　美しい
良い香りで
人の心をひきつける
たとえ　山おくの
道ばたの小さな花であろうと
花は命をもち、それぞれの生き方で
人を楽しませる
人の心をすなおにする
山の岩に咲いた花の力強さは
生きる人に勇気をあたえる

山

上島弘之

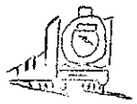
すみきった朝　白雲ひろがり
山々が　顔をみあわせ　あいさつした
朝日が登る

山は、はずかしそうに顔を赤くした
ぼくの好きな山
さみしみも、かなしさも
吹き飛ばしてくれる
元気に学校へいそぐ
やっぱり　山は　大好きだ

きしゃ

坂東邦子

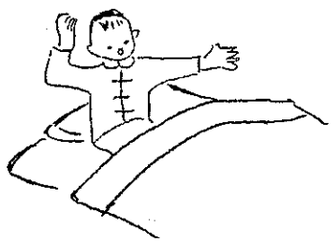
ゴー　ゴー　ゴー　ゴー
汽車が走る
車そうに　むくむく煙をはく汽車
さわやかに　軽く走る電気機関車
昼も　夜も　一日中働く汽車
この汽車に　命をあずけて
どこまでも　行く



冬の朝

池原正

目をこすりながおきる
冷たい風が　ぼくのはなをすする
「あー　寒い」と
ふとんに　もぐる
「子どもは、風の子」と
戸がさけぶ
パッと　起きた
すると、風のやつ
急に　ふかなくなった



机

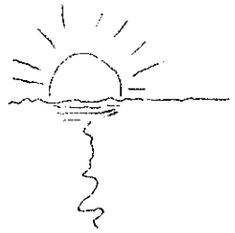
坂東弘子

私の　机は　新しい
でも　いつの間についたか　傷だらけ
私を　このように育ててくれた机
かわいそう
ありがとう
幾多の思い出を残して　私が去る
また　沢山の　良い人を
育てて下さい
ほんとうに　ありがとう
次の人たちは　かわいがるでしょう
机よ　さようなら

朝

島正彦

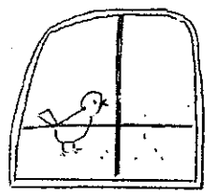
東の空が　赤くそまる
静けさをやぶって
小鳥が　さえずる
遠くで　いきのいい　にわとりの声
うりの田んぼかわ
耕運機の　けたたましい音
家の前を　行きすぎる人
忙しい農家の一日が　はじまった
ぼくも　やるぞ
野も　山も
朝の光に　輝いている
はればれとした朝だ



朝

吉田恵子

窓をあけた
さあっと　朝の光が
部屋一ぱいに　入って来た
今まで　ねむっていた
机や椅子　本やノートが
まるで　宝石でもちりばめたように
きらきら　光っている



牛乳配達

島尻由美子

朝だ　朝だ
さあ　起きろ　牛乳配達
それ　いそげ　いそげ　それいそげ
自転車を　ふっ飛ばして
ガタ　ガタ　ガタ　と音がする
小鳥がびっくり　とびはねる
かかしが　ふふっと　笑っていた

いねかり

久保博子

サク　サク　サク　かまと音
あのだ　このだの金の波が　消えて行く
どこも　ここも　競争だ
あせ水流して　がんばる
お父さん　お母さん
あせふくおくには　笑顔がある

春

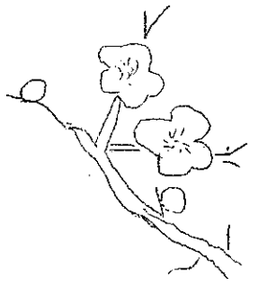
須沢輝代

野にも
山にも
春が
暖かい　そよ風に　乗ってやって来た
桜の芽がふくらみ
つくしのぼうやも顔を出す
草木が　みんな　背伸びする
川の水も
若い香りを　一面にすいながら
さらさら　流れ出す
春って　気持ちが　いいなあ

さくら

鍋谷郁子

ちらこまっていた　草木が
春のよぶ声と共に
わが世と　元気に
顔を　出した
ポカポカと　暖かい風で
こころもをかえて　うれしそう
ほでも　さくらは
おお　いばり
みんな
きれいな服を着て
おれは春の女王と　咲きまくる
春は　花の　ファッションショー



かご

中田恵子

今日も　忙しい　買物かご
お使いの友となり
お使いの片腕となって
今日は　くだもの
明日は　おさかな
かわいい　顔して　だいている
あいたかごを　なげすてたら
ひがんだ　こわい顔して
私を見た
あわてて　そっと　だいてやる
にっこり　笑って　うれしそう

風鈴

坂東京子

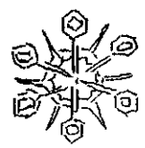
むしあつい　土用だ
かりだ中　にっとりと　あせばむ
ねこも　木かげで　うずくまる
草木も　しおれて　たれさがる
せみは　大声で　わめきたてる
すーっと
北風が　顔をなでる
顔をなでるたびに
鈴が鳴る
鈴が鳴る
楽しく　ダンスする
稲は　ありがとうと　おじぎする

ゆき

長島洋子

雪が　ぱらぱら降って来た
庭に　豆をまいたように
雪が　ちらちら　おどりながら
外は　一面　銀世界

子どもは　元気で　スキーに来る
どの顔も　楽しそう
ころんだ尻は　なお　黒い
赤い手をして　こたつに　もぐりこむ



道

稲場陽子

わたしを育てた　だいじな道
雨の日も
風の日も
毎日通る道
ひとりさびしく歩いたり
喜びいさんで走ったり
長い間　学校へかよった道
思い出　多い道

ストーブ

西島進

寒い朝　赤い顔して　立っている
身も心も　あたためてくれる
ぼくの友だち　やくだつ　ストーブ

土用の日浜辺でたわむれる親子づれ　長田博和
夏の夜船が出て行くおぼろ月　扇原真紀子
大晦日近くなりしや人が動く　長島隆良
白雪が山から里へ下りて来た　前田一子
寒い朝こたつこいしくちこくする　鍋谷芳憲
お母さん大根洗って赤い手　野田能久
つるし柿日光浴して暖かそう　長島峰人
子どもたち夏のしぶきをあびている　田又剛
わた雪が窓をたたいて宝石となる　谷口悦子
いねの穂が夕日にはえてたれさがる　長島栄蔵
台風が大枝おってしゅんかお　中田悦子
初すいか二つに切られて赤い顔　林英昭
赤とんぼ夕日に光って飛んで行く　田又敏明
すいせんの花もちらほらもう春だ　中田美和子

この学校

（第六学年）

・思い出の六年間　楽しかったことが目にうかぶ
　さようなら　在校生の　みなさん　長田博和

・お母さんに　手をひかれてくぐった　なつかしい門
　六ヵ年　学んだことを　中学で生かそう　鍋谷芳憲

・楽しくすごした六年間　さようなら　池原正

・在校生の　みなさん　さようなら　長島隆良

・ゆめをもち　希望にもえた　中学生に　坂東治

・さようなら　桝山小学校の　みなさん　田又敏明

・科学者になるため　中学校へ行っても　がんばろう　林英昭

・春のおとずれと共に　中学生だ
　さようなら　思い出多き　この学校よ　島正彦

・同じことを知り　同じことを学んだ　友よ
　元気で　行こう　西嶋進

・六ヵ年　みんなで学んだ学校よ　さようなら　大田哲行

・中学校へ行って　もっと　がんばろう　長島峰人

・春になれば中学校　うれしいようでこわいような学校
　友よ　元気で　がんばろう　小学校よ　さようなら　田又剛

・さようなら　全校の　みなさん　野田能久

・思い出の　小学校　さようなら　長島栄蔵

・心のおくに　残っている思い出の学校　さようなら　上島弘之

・先生　ありがとう　みんな　さようなら　島尻由美子

・人の心を考え　助け合って　行きましょう　中田美和子

・思い出の　校門よ　さようなら
　希望の道を　一直線に

坂東邦子

・楽しく　学んだり遊んだ　学校よ　さようなら
　同じ事をして来た友よ　明日からも
　一緒に　生きて行こう

鍋谷郁子

・さようなら　楽しく学んだ　思い出の　小学校

中田悦子

・長い間　お世話になった　学校よ　さようなら

前田一子

・「苦」「楽」　ともにした　思い出の
　小学校よ　さようなら

池原洋子

・六年間　共に学んだ　なつかしき友よ　さようなら

稲場陽子

・小学校の友よ　さようなら　また　ある日まで
　中学校の　新しい友よ　今日わ

坂東弘子

・ゆめをもとう　学校よ　友よ　さようなら

川城輝子

・わたしの　学校よ　かわいい友よ　さようなら
　六年間の　いろいろな思い出を　胸に　いだいて

坂東京子

・この学校とも　お別れだ
　在校生の　みなさん　さようなら

長島洋子

・さようなら　小学校　お世話になった先生
　苦楽ともにした友よ　友情は　わかれない

扇原真紀子

・明日のために　希望をもって　生きていこう
　楽しい日　苦しい日があった　六年間
　思い出　残して　さようなら　友よ　学校よ

久保博子

・校門よ　さようなら　友よ　また　あおう

中田恵子

・思い出　だいて　行こう　中学校へ

須沢輝代

・見てて下さい　明日からの　道を

谷口悦子

・在校生の　みなさん　さようなら

吉田恵子

ぼくのゆめ　わたしの将来

・「野球の選手になりたい」
　なによりも好きで、おもしろい。長島や王が　うらやましい。
　もうひとつは　「将棋の名人」
　趣味のひとつ　今の名人より強くなりたい。
　さらに、「パイロット」。
　飛行機で、世界を自由に飛びまわるのも、おつなもの。
　である。
　笑う人もあるだろうが、ぼくのゆめは　まだ　たくさんあるが　このうちひとつだけは、必ず実現したい。

池原正

・私は大人になったら、「農業をしたいし。家畜、酪農
　今、鉛筆を持っているこの手で、花やメロンを早く作ってみたい。
　「誰でも都会にあこがれているのに、あなただけどうして農村に生き残るか」。
　と、いわれるでしょう。　わたしは
　「都会にだけ人生はない。豚や牛を飼い、年々計画を立て　食生活の改善のもとを作り　デンマークの酪農に負けないくらいやれば、村に残っても　豊かに生活ができる」。と　教えたいのだ

坂東弘子

「発明家になろう」。
　タイムマシン付きの楕円形のエアカーに乗り、世界を回り、海もぐり　月へ行き、火星にも行き、太陽系の星全部を回る。新発明　新発明だ
　エジソンのあとをつぐ、世界に名の残る立派な人になりたい。

西嶋進

「婦人警察官」。
　おばあさんに、丁寧に道を教えてあげたり、迷子になった子どもを　やさしく両親をさがしてあげます。
　無駄使いせず　貯金を沢山してお母さんをよろこばせ
　親孝行したい

坂東京子

「内閣総理大臣」
　とても大切な　しかも　辛い仕事　いろいろな難しい問題を　みんなが納得するまで話し合ってきめ　日本国家のために　国民の幸福のためにつくしたい
　やりとげられないと思うが　将来の大きな大きな夢として　いっしょけんめいがんばりたい。

大田哲行

「美容師」。

川城輝子

・思い出の　校門よ　さようなら
希望の道を　一直線に

人の頭を弄るのが好きだ　あの頭　この顔　ちょぴり
おしゃれかな　でも美容師は好き。

田又　剛

「建築家」　大工さんだよ、
住みよい　すばらしい家　ぼくの作った家　みんなに
みせてやりたい
どんなに苦しいことがあっても　難しい仕事でも　や
りとげる立派な人、心のよい人になりたい

中田恵子

「役立つ人」　人々のため
外国の友だちと交通したい　日本のようすを知らせた
り、外国のようすを知ったり　仲よく　平和のために

野田能久

「自動車の運転手」
すばらしい車で、人を運ぶ。じょうずな運転　はっと
する技をとばしてみたい
オリンピックで、金メダルをとろう。

須沢禪代

「オルガンの先生」。
教え子が　立派な人になり　有名な人になる　ゆめはろ
ろ

・わたしの　学校よ　かわいい友よ　さようなら
六年間の　いろいろな思い出よ　さ

れしい　良い子を沢山育てる、世の中のためになり、親
孝行にもなる。こんなよいことはない
生徒にも、まわりの人たちにも、「信用のあるいい先
生になるように」。つとめる。

鍋谷芳憲

「パイロット」
「FB1」に乗って悪人を捕える、世界の大空を飛びま
わろう、空気の棺桶の汚名をとりのぞいてやる。

島尻由美子

「栄養士」。
家庭の幸福は栄養から　予算を考え　丈夫な子を育だ
て　健康な日本人を作りたい

林英昭

「科学者」。
家のテレビ　おんぼろテレビ　いやな感じ。
これからは科学の世界だ　機械化、機械化、どこへ行
っても機械化の世の中、機械にまけず、機械を動かす人
になろう。
みなさん「ゆめ」をえがいて中学へ行こう　がんばろ
う。

校長　中谷豊治
教頭　古草俊雄
教諭（六）大田好雄
〃（三）五十里満義
〃（五）亀田六義
〃（一）土居ヨシエ
〃（四）杉田とみ
〃（二）小城よね子
〃　尾山仁子